

藤原公任と白居易の文学理念

黄 金 堂

(2004年9月30日受理)

Comparative Study on the Literary Theory of Fujiwarano-Kintou and Bai Ju-Yi

Huang Chin-Tang

What is literature? This question has always been controversial. Some say that literature plays an important role in the country management. Others say that literature is just a useless game of word. The former theory of literature had a great influence on Japan. The preface of *Ryounshu* and *Keikokushu* are two good examples. Despite the fact that Japanese literature absorbed the characters of Chinese's, however, it developed its own features.

The aim of this paper is to ascertain the literary theory between Fujiwarano-Kintou in the middle periods of the Heian era and Pai Ju-Yi in Middle-Tang dynasty. Furthermore, I want to clarify the meaning of literature from the aesthetic and artistic point of view.

Key words : Fujiwarano-Kintou, Bai Ju-Yi, literary theory

キーワード：藤原公任，白居易，文学理念

1 はじめに

「文学とは何か」という問については古今の文人たちが様々な議論を交わしてきた。「文学経国」の思想は古くから中国の文学論の中で大きな位置を占めている一方、文学無用論の言説も少なくない。

「文章は経国の大業，不朽の盛事」という考え方は魏の曹丕（187～226）が「典論」で提唱した中国の初めの文学評論である。曹丕の見解は中国文学史の重要な理念であるだけでなく、後世の『文心雕龍』にも繋がっていく文学論の架橋とされる。日本は「文学経国」思想の影響を受け、勅撰三詩集の『凌雲集』の「序」を始め、『経国集』の「序」や書名までに使用され、日本の文学理論の一部にまで発展した。

本論は平安時代の藤原公任（966～1041）と中唐の白居易（772～846）の文学理念に着目し、両者を比較してその共通点と相違点を明らかにし、文学の意義について考察したい。考察方法としては、まず日本の勅撰漢詩集の序と中国の文学論との関係を比較して「文学経国」の理論を見た上で、次に藤原公任の文学理念に注目しつつ、公任の和歌理念を考察する。そして白居易の文学理念を構想期・実践期・完成期からそ

れぞれ考察し、彼の文学理念を明らかにしたい。最後に、藤原公任と白居易の文学理念を比較しながら、両者の文学理念および文学の意義について考えてみたい。

1.1 『凌雲集』の序と文学経国の思想

『凌雲集』は嵯峨天皇の勅命を受け、小野岑守らが編集した勅撰漢詩集の一つである。序文には「文章」の役割について論じた次のような表現が見られる。

臣岑守言。魏文帝有曰。文章者經國之大業。不朽之盛事。年壽有時而盡。榮樂止乎其身。信哉。¹（下線は引用者による。以下同様。）

『凌雲集』の序文によれば、文章は経国の大業，不朽の盛事だと表出されている。これは曹丕の「典論」によるものである。

蓋文章經國之大業，不朽之盛事。年壽有時而盡，榮樂止乎其身。二者必至之常期，未若文章之無窮。（中略）日月逝於上，體貌衰於下，忽然與萬物遷化。斯志士之大痛也。融等已逝，唯幹著論，成一家言。²

曹丕が提起した「文章は経国の大業にして、不朽の盛事なり」という文学理念は当時の文学の基礎を固めていた。そして、文学を国家の大業として発案し、以降の文学評論に大きな影響を与えた。

『凌雲集』は当時の卓越した詩を収録した日本初の勅撰漢詩集である。初唐の王勃・盛唐の李白・中唐の白居易等の詩風が見られる。

就中、白居易は文学経国の思想を継承しつつ、社会と政治の狭間から新しい文学観を樹立しようと動いた。彼の「議文章」「採詩」「與元九書」に書かれた議論はまさにその新風を語った文学理念であろう。

本稿では、詩序の精神と大別した勅撰三集の経国思想をはじめ、藤原公任と白居易の文学理念を比較しつつ、両者の文学理念について論を進めたい。

1.2 『経国集』の序と「文」「質」

勅撰三集の『経国集』の序では、文章について、次のように定義している。

臣聞。天肇書契。奎主文章。古有採詩之官。王者以知得失。故文章者。所以宣上下之象。明人倫之叙。窮理盡性。以究萬物之宜者也。且文質彬彬然後君子。譬猶衣裳之有綺縠。翔鳥之有羽儀。³

『経国集』の序は『凌雲集』と同じく曹丕の「典論」、昭明太子の『文選』の文章によるものが多く見られる。ここで見られる「文質彬彬として、然る後に君子たり」という表現は、言葉の飾り（文）と文章の内容（質）をめぐる議論である。新聞一美氏は、「毛詩正義序」と「文選序」について、「教誡思想という点に限れば、古今序にさほどの影響を与えてはいないのである。古今序は直接詩序によって居り、凌雲集以下の勅撰三集には、この傾向は見られない⁴と論じ、さらに「文学観に於ては、勅撰三集と古今序とは断絶している」としている。それゆえ次に藤原公任の和歌理念、当時の新風である白居易の詩文に目を向けないわけに行かないのである。

2 藤原公任の和歌理念

藤原公任の歌論書は日本の歌論史の中で、内容と形式が整った独立の歌論書として認められたものである。實方清氏は藤原公任の歌論の特質について次のように述べている。

日本歌論という立場から公任歌論は形式と内容の両面で純粹歌論としての成立を見たのである。「古今

集序」や「和歌体十種」などが歌論としての内容は認められるが、独立の歌論書としての形式をなしていなかった。公任の「新撰髓脳」に至ってはじめて歌論としての内容と形式とを持った純粹の日本歌論の成立を見たことにおいて第一の特質であるといえる。公任の心詞論を基盤とした歌論は「新撰髓脳」と「和歌九品」によって見られる。前者では和歌の本質と価値が述べられ、後者では和歌の品等論が具体的に述べられている。⁵

今回はまず藤原公任の『新撰髓脳』と『和歌九品』における和歌の理念を考察し、ついで白居易の文学理念を探究したあとで、両者を対照しながら、その関連性を求めたい。

2.1 『新撰髓脳』

藤原公任の『新撰髓脳』では、和歌の歌論について、次のように論じている。

うたのありさま三十一字惣而五句あり。上の三句をば本と云ひ、下の二句をば末といふ。一字二字あまりたれども、うちよむに例にたがはねば癖とせず。凡そ哥は心ふかく姿きよげに、心におかしき所あるを、すぐれたりといふべし。事おほく添へくさりてやと見ゆるが〔いと〕わろきなり。一すぢにすくよかになむよむべき。心姿相具する事かたくは、まづ心をとるべし。終に心ふかゝらずは、姿をいたわるべし。そのかたちといふは、うち〔聞き〕きよげにゆへありて、哥ときこえ、もしはめづらしく添へなどしたるなり。ともに得ずなりなば、いにしへの人おほく本に哥まくらを置きて、末におもふ心をあらわす。さるをなむ、中比よりはさしもあらねど、始めにおもふ事をいひあらはしたる、わるきことになんする。貫之、躬恆は中比の上手なり。今の人のこのむ、これがさまなるべし。⁶

ここで、藤原公任が提起した「心」と「姿」という用語は彼の歌論の中で重要な位置を占めている。藤原公任が最高とした和歌とは、「心」と「姿」が調和したものとされ、所謂「心姿相具論」である。「心」と「姿」を取捨する際、「姿」を「心」に譲る。則ち、言葉の飾りより和歌の主題が大事だと主張していた。「心」という歌論用語はすでに『古今和歌集』の「仮名序」で論及されているが、藤原公任の『新撰髓脳』では「心」のほかに、「姿」という概念が新しく提起されたのである。

2.2 『和歌九品』

藤原公任が『和歌九品』と命名したのは和歌を九品に等級づけたからである。それは以下のような分類となっている。

- 上上 これはことばたへにしてあまりの心さへある也。
 上中 ほどうるはしくて餘の心ある也。
 上下 心ふかゝらねどもおもしろき所ある也。
 中上 心詞とゞこほらずしておもしろき也。
 中々 すぐれたる事もなくわろき所もなくあるべきさまをしれる也。
 中下 すこしおもひたる所ある也。
 下上 わづかに一ふしある也。
 下中 ことの心むげにしらぬにもあらず。
 下々 詞とゞこほりておかしき所なき也。⁷

『和歌九品』はそれぞれの品に例歌を2首ずつ挙げ、歌の優劣を論じた。「上品上」の歌は最高のレベルとされているのに対して、「下品下」の歌が最低の格付けとされている。

2.3 心と姿

以上のように、藤原公任の和歌の理念は彼の歌論書「新撰髓脳」と「和歌九品」から窺える。そして、藤原公任が提起した和歌の最高理念は「心」と「姿」が調和した「心姿相具論」というものである。ここでいう「心」とは和歌の内容を指し、「姿」は言葉の彩を指す。また、「心」と「姿」の調和が取れなかった場合は、まず「心」を優先し、「姿」というものは補助的な役割であると主張した。

3 白居易の文学理念

白居易の文学理念へ接近する為に、彼の構想期・実践期・完成期の文章に関する議論から検証したい。たとえば、元和の初（805）、白居易が時勢を客観的に分析しつつ、その政策や対策を擬して作ったのは「策林」である。ここで彼は政治から文芸まで、七十五の道を論じた。「議文章」と「採詩」は白居易の構想期における文学評論の代表作とも言えよう。

そして、構想期で表出した理念は実践期において新楽府と諷諭詩へと展開した。彼の詩においては、『白居易集』の第一巻から第四巻までの諷諭詩が特に有名である。

ところで、その文学理念の集大成は完成期における親友元稹への書簡「與元九書」に見られる。この書簡

の中で、白居易は自分の文学理念を展開し、多様な視点から古今の文学を鳥瞰した。以下、各時期の文学理念を具体的に見ていこう。

3.1 構想期 — 「議文章」と「採詩」

白居易の早期の文学理念は儒教観念によったものだと言えよう。例えば、「策林」の中の「文章を議する」と「詩を採る」の二篇は彼の理想とした文学の在り方について論及している。「文」の位置づけから当時の科挙制度まで多様な視点から文学の崇高な位置を力説したのである。「議文章」では、文学と政治の関係を論じ、「採詩」では、文学の理想的な姿と文学の役割について論じた。彼が主張していた詩の役割とは何かと言うと、詩歌はまさしく政治や社会を諷諭することによって、その働きが認められるというものである。これによって、詩の有用性を確保した上で次のように論を展開していく。

白居易の「策林」の序で彼は次のように述べている。

元和初、予罷校書郎、與元微之將應制舉、退居於上都華陽觀、閉戶累月、揣摩當代之事、構成策目七十五門。及微之首登科、予次焉。凡所應對者、百不用其一二。其餘自以精力所致、不能棄捐、次而集之、分為四卷、命曰「策林」云耳。⁸（「策林一 策林序」）

「策林」というものは当時の政策白書と言えるのである。白居易は校書郎の職を罷め、友人の微之と共にこれを作った。その文学理念の内実を考える際、第六十八門の「議文章」と第六十九門の「採詩」が重視されている。

白居易の「策林」第六十八門「議文章」の中では、文学の位置付けと科挙制度の問題について、次のように論じている。

『易』曰：「觀乎人文、以化成天下。」『記』曰：「文王以文理。」則文之用大矣哉。自三代以還、斯文不振、故天以將喪之弊、授我國家。國家以文德應天、以文教牧人、以文行選賢、以文學取士：二百餘載、煥乎文章。故士無賢不肖、率注意於文矣。然臣聞：大成不能無小弊、大美不能無小疵。是以凡今秉筆之徒、率爾而言者有矣、斐然成章者有矣。⁹（「策林六十八 議文章」）

換言すれば、「文」の役割は一国の政治に当たって、樞要的な存在であることは否めないと主張している。また、文学と政治の関係、その在り方について、次のように述べている。

故歌詠，詩賦，碑碣，讚詠之製，往往有虛美者矣，有媿辭者矣。若行於時，則誣善惡而惑當代；若傳於後，則混真偽而疑將來。臣伏思之，恐非先王文理化成之教也。且古之為文者，上以紉王教，繫國風，下以存炯戒，通諷諭：故懲勸善惡之柄，執於文士褒貶之際焉；補察得失之端，操於詩美刺之間焉。今褒貶之文無覈實，則懲勸之道缺矣；美刺之詩不稽政，則補察之義廢矣。¹⁰（「策林六十八 議文章」）

人々は詩歌もしくは文章を創作するに当たって、往々にして虚偽や誇張の作を創出してしまふことに開示した上で、その失われた文の本質を挽回するには、詩歌を以て政治を諷刺しなければならない。政治や社会を諷刺し続ける「文学」の在り方は王道だと強調していた。

白居易はさらに文学の理想的な姿とは何かと疑問しつつ、その回答を求め続けている。彼は言葉の彩と文章の内容について、以下のように論じている。

雖彫章鏤句，將焉用之。臣又聞：稂莠秕稗生於穀，反害穀者也；淫辭麗藻生於文，反傷文者也。故農者耘稂莠，簸秕稗，所以養穀也。王者刪淫辭，削麗藻，所以養文也。伏惟陛下：詔主文之司，論養文之旨，俾辭賦合炯戒諷諭者，雖質雖野，採而獎之；碑誄有虛美媿辭者，雖華雖麗，禁而絕之。若然，則為文者，必當尚質抑淫，著誠去偽，小疵小弊，蕩然無遺矣。則何慮乎皇家之文章，不與三代同風者歟。¹¹（「策林六十八 議文章」）

白居易の考えでは、美しい飾りだらけの言葉は文章を立派に見せるところか、却ってその「文」を傷つけるのであると主張し、文学の理想型としては「尚質抑淫，著誠去偽」の枠組みにあると言う。即ち、言葉の虚飾より「文」の内容のほうが重要だという考え方である。

白居易の構想期における文学理念としてもう一つ見逃せないのは「策林」の「採詩」という第六十九門である。ここでは、白居易が主題として捉えたものは「詩」という領域である。なぜ詩なのか、なぜ詩は時勢を反映しなければならないのか、などという疑問は第六十九門の「採詩」から窺えるのである。その論説を次の引用から確認しよう。

聖王酌人之言，補己之過，所以立理本，導化源也。將在乎選觀風之使，建採詩之官，俾乎歌詠之聲，諷刺之興，日採於下，歲獻於上者也。所謂言之者無罪，聞之者足以自誠。大凡人之感於事，則必動於情；然

後興於嗟嘆，發於吟詠，而形於歌詩矣。故聞「蓼蕭」之詩，則知澤及四海也。聞「黍稷」之詠，則知時和歲豐也。聞「北風」之言，則知威虐及人也。聞「碩鼠」之刺，則知重斂於下也。聞「廣袖高髻」之謠，則知風俗之奢蕩也。聞「誰其穫者婦與姑」之言，則知征役之廢業也。故國風之盛衰，由斯而見也；王政之得失，由斯而聞也；人情之哀樂，由斯而知也。然後君臣親覽而斟酌焉：政之廢者修之，闕者補之，人之憂者樂之，勞者逸之。所謂善防川者，決之使導；善理人者，宣之使言；故政有毫髮之善，下必知也；教有錙銖之失，上必聞也。則上之誠明，何憂乎不下達。下之利病，何患乎不上知。上下交和，內外胥悅。若此，而不臻至理，不致昇平，自開闢以來，未之間也。老子曰：「不出戶，知天下。」斯之謂歟。¹²（「策林六十九 採詩」）

「言う者は罪なし，聞く者は自ら誠め」という主張は白居易の詩に賦与した使命であり、それを以て人々は政治を批評し、また為政者は人々の喜怒哀楽を知ることができる。白居易が提起した方策は当時の封建社会にとっては、民の声を為政者の耳に届けるための方法として認識されている。逆に言えば、為政者は民の生活風景を詩を通して把握することもできる。

3.2 実践期—新楽府序と諷諭詩

白居易は実践期に入ると、「新楽府」という新しい文学理念を提唱した。彼の「新楽府」の序文によると、詩の「質」（内容）を重視することによって、詩の地位がさらに高まるのである。その「新楽府」の精神は詩の諷諭性であると言えよう。次の元和七年（811）に作られた「新楽府」の序文を見よう。

序曰：凡九千二百五十二言，斷為五十篇。篇無定句，句無定字，繫於意，不繫於文。首句標其目，卒章顯其志，「詩」三百之義也。其辭質而徑，欲見之者易論也。其言直而切，欲聞之者深誠也。其事覈而實，使采之者傳信也。其體順而肆，可以播於樂章歌曲也。總而言之，為君，為臣，為民，為物，為事而作，不為文而作也。¹³（「諷諭三 新楽府 并序」）

序に曰く、凡て九千二百五十二言，斷めて五十篇と為す。篇に定句無く句に定字無し。意に繋けて文に繋げず。首句に其目を標はし，卒章に其志を顯はすは，詩三百の義なり。其辭質にして徑，之を見る者の論り易からんことを欲してなり。其言直にして切，之を聞く物深く誠めんことを欲してなり。其事覈にして實，之を采る者をして傳へしめんとなり。

其體順にして律、以て樂章歌曲に播す可し。總て之を言へば、君の為め臣の為め民の為め物の為め事の為めにして作る、文の為にして作らざるなり。¹⁴

『礼記』の「楽記」によれば、「宮を君と為し、商を臣と為し、角を民と為し、徵を事と為し、羽を物と為す。五者は亂れざれば則ち怙慝の音無し」¹⁵と言ひ、音律と文学の密接な関係が語られている。そして、白居易が「新楽府」と名付けた理由は、従来の「楽府」（民謡）に新しい文学理念を提起したからである。即ち、詩の諷諭とその優れた音律性を持つことによって、娯楽のための文学が、政治と社会にも役立つような「有用」の文学に転向したのである。

3.3 完成期 — 「與元九書」

元和十年（815）の白居易と元稹との書簡「與元九書」には次のように論じられている。

夫文尚矣。三才各有文，天の文，三光首之；地の文，五材首之；人の文，六經首之。就六經言，「詩」又首之。¹⁶（「與元九書」）

夫れ文は尚し。三才各文あり。天の文は三光之が首たり。地の文は五材之が首たり。人の文は六經之が首たり。六經に就いて言へば詩文之が首たり。¹⁷

このように、「與元九書」で論じられた文学論は「文」の崇高な地位を確保しただけではなく、白居易が言う「三才の文」（天の文、地の文、地の文）の中で、「詩」が「人の文」においては一番重要な役割を果たしていると主張した。

次に、「詩」の諷諭性を通して、彼が力説したのは、文学は国を治めるため「有用」なものであるという主張である。「與元九書」の次のような一節からそれを知ることができる。

何者。聖人感人心而天下和平。感人心者、莫先乎情、莫始乎言、莫切乎聲、莫深乎義。詩者、根情、苗言、華聲、實義。上自賢聖、下至愚駘、微及豚魚、幽及鬼神；羣分而氣同、形異而情一；未有聲入而不應、情交而不感者。聖人知其然、因其言、經之以六義；緣其聲、緯之以五音。音有韻、義有類；韻協則言順、言順則聲易入。類舉則情見、情見則感易交。於是乎孕大含深、貫微洞密、上下通而一氣泰、憂樂合而百志熙。（中略）言者無罪、聞之足戒。言者聞者、莫不兩盡其心焉。¹⁸（「與元九書」）

何となれば聖人は人心を感ぜしめて天下和平なればなり。人心を感ぜしむるは情より先なるはなく、言より始なるはなく、聲より切なるはなく、義より深きはなし。詩は情を根にし言を苗にし聲を華にし義を實にす。上は賢聖より下は愚へに至り、微は豚魚に及び、幽は鬼神に及ぶまで、羣は分かるも氣は同じく、形は異なるも情は一なり。未だ聲入りて應ぜず、情交りて感ぜざるものあらず。聖人は其の然るを知り、其言に因つて之を経するに六義を以てし、其聲に縁つて之を緯するに五音を以てす。音に韻のあり義に類あり。類協へば則ち言順なり。言順なれば則ち聲入り易し。類舉れば則ち情見。情見れば則ち感交わり易し。是に於てか大を孕み深を含め微を貫き密を洞し、上下通じて一氣泰く、憂樂合して百志熙まる。（中略）言ふ者罪なく、聞く者戒と作す。言ふ者聞く者兩ながら其心を盡さざるはなし。¹⁹

白居易は当時の封建社会の体制にいながらも、言論の自由もしくは文章の自由を先駆者として提唱した果敢直言の勇者だと思われる。

また、白居易は虚飾だけの「文」（言葉・彩）、例えば「風雪花草」の詩などを強く批判している。彼は詩には「質」（内容・諷諭）がなければ意味がないと認識していた。例を挙げてみると、次のような論説が見られる。

陵夷至于梁陳間、率不過嘲風雪、弄花草而已。噫、風雪花草之物、三百篇中、豈捨之乎。顧所用何如耳。設如「北風其涼」、假風以刺威虐也。「雨雪霏霏」、因雪以愍征役也。「棠棣之華」、感華以諷兄弟也。「采采芣苢」、美草以樂有子也。皆興發於此、而義歸於彼；反是者可乎哉。然則「餘霞散成綺、澄江淨如練」；「離花先委露、別葉乍辭風」之什、麗則麗矣、吾不知其所諷焉。故僕所謂嘲風雪、弄花草而已。于時、六義盡去矣。²⁰（「與元九書」）

陵夷して梁陳の間に至りては、率ね風雪を嘲り花草を弄ぶに過ぎざるのみ。噫風雪花草の物は三百篇中豈に之を捨てんや。用ふる所如何を顧みるのみ。設へば「北風其涼」の如きは風を假りて以て威虐を刺るなり。「雨雪霏霏」は雪に因つて以て征役を愍むなり。「棠棣之華」は華に感じて以て兄弟を諷するなり。「采采芣苢」は草を美して以て子あるを樂むなり。皆興は此より發して義は彼に歸す。是に反せば可ならんや。然らば則ち「餘霞散成綺、澄江淨如練」、「離花先委露、別葉乍辭風」の什、麗は則ち麗

なり。吾その諷する所を知らず。故に僕の所謂風雪を嘲り花草を弄ぶのみ。時に六義盡く去る。²¹

このような状況の中で、白居易は詩に対する使命感を持つに至り、その使命感から終に詩を自分の人生の課題として捉えるようになった。

僕常痛詩道崩壞，忽忽憤發，或食輟哺，夜輟寢，不量才力，欲扶起之。嗟乎，事有大謬者，又不可一二而言；然亦不能粗陳於左右。僕始生六七月時，乳母抱弄於書屏下，有指「無」字，「之」字示僕者，僕雖口未能言，心已默識，後有問此二者者，雖百十其試，而指之不差。則僕宿習之緣，已在文字中矣。²²（「與元九書」）

白居易は詩道の崩壊に痛みを感じながら、その道を正そうとする姿勢を以上のように記述した。また、その自己分析のように語った「僕の宿習の緣、已に文字の中に在り」は、白居易の文学に対する愛好の証言でもあると言えよう。そして、科擧に合格した白居易は、「詩」の働きを如何に実現したのだろうか。如何に「詩」を政治・社会と深く繋げていくのだろうか。その展開を見るには、「與元九書」の一節を見る必要がある。

自登朝來，年齒漸長，閱事漸多，每與人言，多詢時務。每讀書史，多求理道。始知文章合為時而著，歌詩合為事而作。（中略）凡聞僕「賀雨」詩，而衆口籍籍，已謂非宜矣。聞僕「哭孔戡」詩，衆面脈脈，盡不悅矣。聞「秦中吟」，則權豪貴近者相目而變色矣。聞「樂遊園寄足下詩」，則執政柄者扼腕矣。聞「宿紫閣村」詩，則握軍要者切齒矣。²³（「與元九書」）

朝に登りてより來，年齒漸く長じ，事を閱すること漸く多し。人と言ふ毎に多く時務を詢ふ。書史を讀む毎に多く治道を求む。始めて知る文章は合に時の為に著すべく，歌詩は合に事の為に作るべきを。（中略）凡そ僕が賀雨詩を聞いては，衆口籍籍として已に宜しきにあらずと謂ふ。僕が哭孔戡詩を聞いては衆面脈脈として盡く悦ばず。秦中吟を聞いては則ち權豪貴近の者相目で色を變ず。樂遊園寄足下詩を聞いては則ち政柄を執る者腕を扼す。宿紫閣村詩を聞いては則ち軍要を握る者切齒す。²⁴

以上のように、白居易の詩に対する理念は社会的・政治的な働きを有するものを重視していることは間違いないであろう。また、そのような「時のため、事の

ため」に作る文学の理念が、それ以前の「詩道」とは異なる「質」を重んずる新しい思惟を作り出したのである。

新樂府の提唱とともに、白居易の詩道は新風を巻き込みつつ、「質」の内在と「文」の体裁をどのように整えていくのか。その本質を明らかにするために、まず白居易の志とその行動から見ることにしよう。

僕志在兼濟，行在獨善：奉而始終之則為道，言而發明之則為詩。謂之「諷諭詩」，兼濟之志也。謂之「閑適詩」，獨善之義也。故覽僕詩，知僕之道焉。其餘「雜律詩」，或誘於一時一物，發於一笑一吟，率然成章，非平生所尚者；（中略）今僕之詩，人所愛者，悉不過「雜律詩」與「長恨歌」已下耳。時之所重，僕之所輕。²⁵（「與元九書」）

僕志兼濟に在り，行獨善に在り。奉じて之を始終すれば則ち道となり，言うて之を發明すれば則ち詩となる。之を諷諭詩と謂ふは兼濟の志なり。之を閑適詩と謂ふは獨善の義なり。故に僕の詩を覽ば僕の道を知らん。其餘の雜律詩は或は一時一物に誘われ，一笑一吟に發し，率然として章を成す。平生尚ぶ所のものにあらず。（中略）今僕の詩，人の愛する所もの，悉く雜律詩と長恨歌已下とに過ぎざるのみ。時の重んずる所は僕の軽んずる所なり。²⁶

「兼濟の志」は諷諭性の「質」を持つ詩を通じて、世間に広がるのに対して、「獨善の行」は詩の娯楽性を「文」に託し、人々の心の琴線に感動を引き起こすのである。白居易の名高い詩「長恨歌」（卷十二 感傷四）を例として見れば、それは遠く日本にも伝わり、藤原公任の『和漢朗詠集』には四回²⁷も引かれていた。白居易が重要視していなかった言葉の華麗さを強調する「長恨歌」は却って遠く広がった。白居易の詩は「質」を重視しているが、「文」の彩が欠けると、その魅力が落ちることに気付いたのであろう。

白居易は文学に心酔した姿について、「詩仙」と表現され、その熱意は「詩魔」と呼ばれるまでに至った。彼の文学に耽溺した世界は次の一節に現れている。

知我者以為詩仙，不知我者以為詩魔。何則，勞心靈，役聲氣，連朝接夕，不自知其苦，非魔而何。偶同人，當美景，或花時宴罷，或月夜酒酣，一詠一吟，不知老之將至，雖驂鸞鶴，遊蓬瀛之適，無以加於此焉，又非仙而何。²⁸（「與元九書」）

以上のように、白居易の文学理念が成熟期を迎えた

とき、文章の「質」は勿論必要な要素として捉えられてはいたが、「文」に彩を施した文学作品は結局『白居易集』から切り捨てられなかった。むしろ「文学経国」の「有用」の文学に対して、このような娯楽のための「無用」の文学こそ、多くの人々の生活に浸透し、歓迎されたのである。

3.4 質と文

白居易の文学理念は「質」と「文」が調和したものだと考えられる。美しい言葉の虚飾だけの「風雪花草」のような文学は無意味だとされ、文学には良い「質」がなければ、文章としては不完全なものであるとされるが、また「文」が彩に欠けると、優れた文学の範疇に入り難くなるのである。ここでは、白居易が決して「文」を全面的に否定したのではなく、その「文」の使用方法によって、文学の価値が「有用」と「無用」に別れたのであるということ指摘しておきたい。

白居易の早期の文学理念は「尚質抑淫、著誠去偽」というように「質」を重用視してきたのだが、成熟期を迎えた「與元九書」では、「噫風雪花草の物は三百篇中豈に之を捨てんや。用ふる所如何を顧みるのみ」と、文学に新しい理念を賦与したのである。その理想型の実体は「質」と「文」が調和した文学なのであろう。

4 おわりに

平安時代初期の日本は中国の文学を積極的に摂取したが、894年に遣唐使の派遣を中止し、そこから国風の芽が甦った。そして、中国文学を母体とする唐風から切り離され、新しい和歌の理念を確立した。

藤原公任は漢詩・和歌・管弦の三才に堪能の平安貴族として、白居易の影響を受けながら、独自の歌論を打ち立てた。「心姿相具論」は藤原公任の独自の歌論であるが、その根底には白居易の「質と文」説の影も見えらると思われる。

白居易は『白氏文集』に収録した詩を、「諷諭」「閑適」「感傷」「律詩」と分類した。彼の詩歌は平明な諷諭詩や新楽府に見られるように、誰でも理解されることを目指している。しかしながら、白居易が提唱した「新楽府」の改革運動は当時の封建的社会ではそれほど広がらなかった。彼が言う、「時の重んずる所、僕の軽んずる所」の「雑律詩」と「長恨歌」などは人口に膾炙し、それらは日本や中国の人々に高く評価された。そして、『白氏文集』が日本に輸入され、「長恨歌」「琵琶行」などの傑作は平安朝の文学に多大の影響を

与えたことは周知の事実である。特に藤原公任は彼の編集した『和漢朗詠集』の803首の中で白居易の詩句を136句も選んだ。これは数量的にも他の詩歌を圧倒している。また、選ばれた136句を見ると、白居易の四大分類「諷諭・閑適・感傷・雑律詩」の中では、「雑律詩」が圧倒的な数を占め、その他は「諷諭詩」8句・「感傷詩」4句が見られるが、「閑適詩」は選ばれていない。その理由は、藤原公任の『和漢朗詠集』ならびに彼の文学理念と深く関わっていると思われる。

白居易の文学理念は「文章は時の為に著すべく、歌詩は合に事の為に作るべきを」と述べているように、社会批判と政治批判を鋭く行い、政治と社会における秩序の挽回と再構築を目指す「諷諭詩」に力を入れた。一方、藤原公任は政治風刺や社会風刺の詩に興味を示していない。

藤原公任の「心と姿」の「心」の捉え方は白居易の「質」と相違していると思われる。即ち、藤原公任の「心」という理念は白居易の「質」から政治・社会諷諭を除いたものだと考えられる。この視点から見れば、藤原公任の関心は白居易の政治文学の理念と乖離していると言えよう。藤原公任の和歌理念は『万葉集』から受け継いだ親愛の情を述べる「相聞」や人生の無常を嘆く「挽歌」など、人間のまことな「心」を有した理念なのではないだろうか。

白居易はいわゆる政治・社会に役立つ「有用」の文学に力を入れたにもかかわらず、実は彼自身が軽んじていた風雪花草の「無用」の文学の詩文を一番多く作った。「與元九書」最後の一節「我を知る者は我を詩仙として見る、我を知らざる者は我を詩魔と視する」というところから見ると、白居易の「無用」の文学に対する執着が感じられる。かつて革命的な文学運動は白居易の理想であったが、後に政治の圧迫を経験し、「新楽府」の発展も抹殺された。そして、老荘思想と仏教思想を経て、「僕の宿習の縁は已に文字の中に在り」という自分のための「文」を作り始めた。即ち、政治・社会風刺の「質」から人生、恋愛、風雪花草などを詠歌する「質」に変わったのである。藤原公任が『白氏文集』の中で目を向けたところはまさに白居易の「感傷・雑律詩」の娯楽文学である。

以上の考察を通して、藤原公任と白居易の「姿」と「文」を崇拜する精神は一致しているが、「心」と「質」の捉え方が大きく懸け離れていると言える。白居易は唯美主義の文学に抵抗したが、彼の詩歌と文章を見ると、実は文彩に富んでいる。孔子が提起した「質文に勝てば則ち野。文質に勝てば則ち史。文質彬彬として、然る後に君子たり」²⁹という人格の理想型は日本の『経国集』にも見られるように日本でも重視され

ている。白居易の文学理念は、「質」と「文」が調和した形こそ「文格」の在り方であると主張している。藤原公任は中国の文学論の影響を受けながら、「心姿相具論」という彼独自の和歌の理想型を作ったのである。

【注】

- ¹ 佐久節校注『日本文学大系 第二十四卷』（国民圖書 1927年）89頁
- ² 周啓成等注譯『新譯昭明文選 四』（三民書局 1997年）2468頁。
- ³ 佐久節校注『日本文学大系 第二十四卷』（国民圖書 1927年）233頁
- ⁴ 新間一美『平安朝文学と漢詩文』（和泉書院 2003年）18頁。
- ⁵ 實方清『文芸理論における新詞論』（二）（『関西学院大学日本文学会』第三十五卷 第二号 1983年）2頁
- ⁶ 久松潜一校注『歌論集能楽論集』（日本古典文学大系65 岩波書店 1969年）26頁。
- ⁷ 同書。
- ⁸ 顧學頡校『白居易集 四』（北京中華書局 1999年）1287頁。
- ⁹ 同書，1369頁。
- ¹⁰ 同書，1369頁。
- ¹¹ 同書，1369頁。
- ¹² 顧學頡校『白居易集 四』（北京中華書局 1999年）1370～1371頁。
- ¹³ 顧學頡校『白居易集 一』（北京中華書局 1979年）52頁。
- ¹⁴ 佐久節訳注『白楽天全詩集 1』「統国訳漢文大成」（日本図書 1989年）235頁～236頁による訓読。
- ¹⁵ 竹内照夫『礼記 中』「新釈漢文大系28」（明治書院 1977年）558頁の書き下し。原文「宮為君，商為臣，角為民，徵為事，羽為物。五者不亂，則無

怙憑之音矣。」

- ¹⁶ 顧學頡校『白居易集 三』（北京中華書局 1999年）960頁。
- ¹⁷ 佐久節訳注『白楽天全詩集 1』「統国訳漢文大成」（日本図書 1989年）5頁による訓読。なお、「六經に就いて言へば詩文之が主たり」と佐久節氏の訓読しているが、『白居易集』の原文にあわせて、「主」を「首」に変更した。
- ¹⁸ 顧學頡校『白居易集 三』（北京中華書局 1999年）960頁。
- ¹⁹ 佐久節訳注『白楽天全詩集 1』「統国訳漢文大成」（日本図書 1989年）5～6頁による訓読。
- ²⁰ 顧學頡校『白居易集 三』（北京中華書局 1999年 第六版）961頁
- ²¹ 佐久節訳注『白楽天全詩集 1』「統国訳漢文大成」（日本図書 1989年）6頁による訓読。
- ²² 顧學頡校『白居易集 三』（北京中華書局 1999年 第六版）962頁。
- ²³ 同書，962頁。
- ²⁴ 佐久節訳注『白楽天全詩集 1』「統国訳漢文大成」（日本図書 1989年）26頁～27頁による訓読。
- ²⁵ 顧學頡校『白居易集 三』（北京中華書局 1999年）964～965頁。
- ²⁶ 佐久節訳注『白楽天全詩集 1』「統国訳漢文大成」（日本図書 1989年）7頁による訓読。
- ²⁷ 白居易の「長恨歌」からの引用は四首が挙げられる。「行宮見月傷心色，夜雨聞猿斷腸声。」「春風桃李花開日，秋露梧桐葉落時。」「夕殿螢飛思悄然，秋灯挑盡未能眠。」「遲遲鐘漏初長夜，耿耿星河欲曙天。」という詩句は、すべて白居易の「長恨歌」から選ばれている。
- ²⁸ 顧學頡校『白居易集 三』（北京中華書局 1999年）965頁。
- ²⁹ 加地伸行訳注『論語』（講談社 2004年）134頁「雍也 第六」の訳による。

（主任指導教員 水島裕雅）